

新着案内

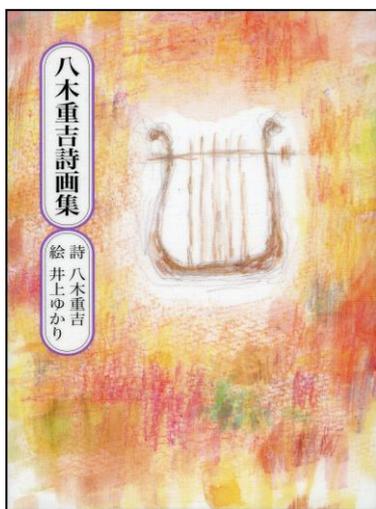
町田の文学

2016年6月30日発行 第34号

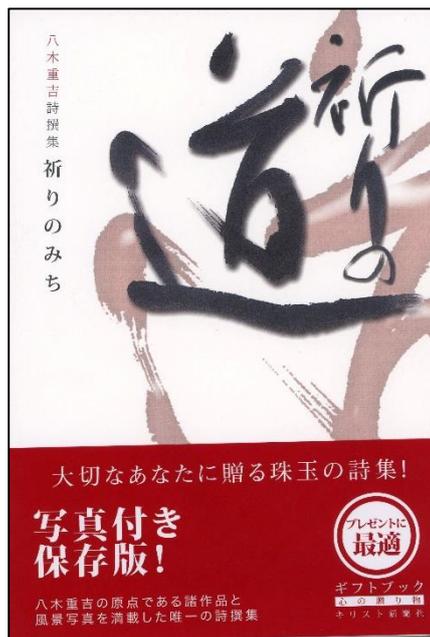
町田ゆかりの作家や市民の皆さまがお書きになった文学作品のうち、
2016年3月から5月末までに、
購入や寄贈により町田市民文学館で受入れした主なものをご紹介します。
これらの作品は、町田市立図書館の利用券を使って借りることができます。
貸出中の場合は、リクエストサービスをご利用ください。
また、市民の皆さまがお書きになった文学作品のご寄贈もお待ちしております。
詳しくは、カウンター職員にお尋ねください。



文学



★『八木重吉詩画集』
詩：八木重吉／絵：井上ゆかり
童話屋（文庫判 109頁）



★『八木重吉詩撰集 祈りのみち』
八木重吉著 キリスト新聞社
（A5判 83頁）

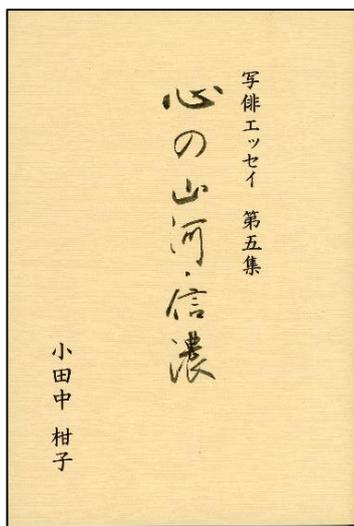
町田市相原に生まれ、いまでも多くのファンを持つ夭逝の詩人・八木重吉。左は、彼の代表作を中心に48篇の詩に井上ゆかりさんの淡い挿絵を添えて紹介。右は、代表作のほか敬虔なクリスチャンとしての信仰を詠った詩70篇を、美しい写真とともに収めています。来年2017年は詩人の没後90年。今秋10月22日（土）から12月25日（日）まで、市民文学館では本邦初の本格的な「八木重吉展」を開催します。

★『写俳エッセイ第5集 心の山河・信濃』小田中柑子著

私家版 (A5判 305頁)

小田中柑子さんは、信州須坂ご出身の俳人。長らく町田市俳句連盟等で要職を務める傍ら、文学館の子ども俳句教室にもお力添えをいただいています。これまでに句集3冊のほか、「写俳エッセイ」と題する俳文集も編まれ、本書はその5冊目。収録作品は、長野県人会連合会の会誌『信州の東京』に平成8年5月以来毎月掲載されたもので、生まれ故郷やご自宅のあった福島県双葉郡富岡町などに関する俳文50篇余が春夏秋冬の各章のもとに収められています。

各々の文末にはむろん句が掲げられていますが、「東日本大震災その1」から「その3」に添えられた句は、失われた人々やふるさとへの思いを詠って悲痛。「涅槃西風人を探すに仮役場」「原子炉の闇を切り裂く山背風かな」「逃水や街に瓦礫を積みしまま」「海鳴りは魂呼ぶごとし鳥雲に」……。



★『Witchenkare ウィッチンケア』Vol. 7

多田洋一／制作責任 yoichijerry (A5判 217頁)

市内在住の多田洋一さん編集の「インディーズ文芸創作誌」第7号。気鋭の寄稿者38名による37篇の書下ろし作品(小説やエッセイ)を収録。以下、多田さんへの一問一答。

Q:「インディーズ文芸創作誌」って何ですか?

A: 出版社の発行物ではなく、発行人個人が自由に編集／制作して、独自のルートで世の中に流通させています。「文」を「芸」にする人が「創作」したものをまとめた(誌)もの、という意味で「文芸創作誌」と名乗っています。

Q:「Witchenkare」ってタイトル、変わってますね。どういう意味ですか?

A: 英語のKitchenware(キッチンウェア)の「w」と「K」を入れ替えて命名しました。「地球滅亡の日が…」といった壮大な物語より、台所まわりの雑事など、身の丈に合った内容の作品を掲載したいな、と思って。でも、読者にも書店にもなかなか覚えてもらえない名前で、いまでもちょっと苦勞しています。

Q: 創刊のきっかけは?

A: 私は、ずっと雑誌やテレビ関連書籍のスタッフ仕事を続けてきました。2010年頃、自分のフィールドで自由にやれることをやってみたいと思い至り、やや衝動的に創刊しました。最初は「売ること」もあまり意識していませんでした。

Q: この雑誌がめざすものは?

A: なによりも書き手の自由な発想を大事にしています。特定の専門分野や雑誌が設定したテーマについて寄稿依頼するのではなく、自身が面白いと思ったことについて、「試し書き」のつもりで執筆してもらおうと。小誌に書いたものが「種」となって、いずれ寄稿者各人の執筆活動にフィードバックされることを願っています。

Q: 今号の中で特にお薦めの作品は?

A: 目次の人名／作品タイトルに文字の大小もなく、すべてが「お奨め」ですが…でも、長谷川町蔵さんの作品には本町田にある書店が登場します。また我妻俊樹さん、かとうちあきさんは町田にゆかりの深い寄稿者。柳瀬博一さんの国道16号線をテーマにした作品も、町田近辺の方なら身近に感じられると思います。



Q：町田という街をどう思いますか？

A：小中高校は町田で、3年前に実家のある町田に戻ってきました。かつての都南デパート周辺が広い道路になって、すっかり洗練されたなあ、と。それでも、個人的にはまだ東京は「電車で多摩川を渡った向こう側」という感覚が消えず、それは町田という街のエネルギーのもののようにも思えます。慎ましさと逞しさの源泉、というか。

タイトル	編著者	出版社	出版年
遠藤周作 (Kawade夢ムック 文藝別冊)		河出書房新社	2016.3
ウィッチンケア vol. 7	多田洋一／制作責任	yoichijerry	2016.4
写俳エッセイ 第5集 心の山河・信濃	小田中柑子	小田中 柑子	2016.5
真犯人	翔田寛	小学館	2015.1
酒場の風景 (銀河叢書)	常盤新平	幻戯書房	2016.4
昭和にサヨウナラ	坪内祐三	扶桑社	2016.4
風来鬼語	西村賢太	扶桑社	2015.12
東京者がたり	西村賢太	講談社	2015.1
八木重吉詩撰集 祈りのみち	八木重吉	キリスト新聞社	2015.9
八木重吉詩画集	八木重吉	童話屋	2016.3



一般書

★『自然のとびら』文：ケイ・マグワイア／絵：ダニエル・クロール／訳：齋藤美和
アノニム・スタジオ (30×30 79頁)

ロンドンに住む作家、園芸家のケイ・マグワイアと、ブルックリンを拠点に活動するアーティスト、デザイナーのダニエル・クロールによる絵本。

四季の移ろいを、庭、野菜畑、農場、畑、池、果樹園、街の事物の変化に託して、美しい挿絵と簡潔な文でつづる。訳者の齋藤美和さんは、本や雑誌の編集、執筆の仕事を経て、現在町田市にある「しぜんの国保育園」で主に子育て支援を担当されています。

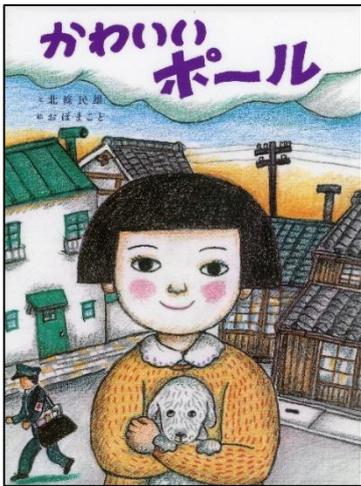
版元は、「風や光のささやきに耳をすまし、暮らしの中の小さな発見を大切にひろい集め、日々のささやかなよろこびを見つける人と一緒に本を作ってゆく」アノニマ・スタジオ。



タイトル	編著者	出版社	出版年
民警	猪瀬直樹	扶桑社	2016.3
デッドデッドデーモンズデデデデストラクション 4	浅野いにお	小学館	2016.3
自然のとびら	ケイ・マグワイアほか	アノニマ・スタジオ	2015.9



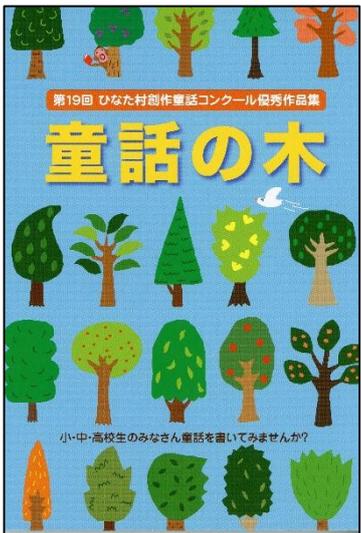
子どもの本



★『かわいいポール』文：北條民雄／絵：おぼまこと 国立ハンセン病資料館（25×19 33頁）

小説家・北條民雄は、1932年にハンセン病と診断され、翌年東京都下の全生病院（いまの国立療養所多磨全生園）に入院しました。その後、いろいろな読み物を執筆し、川端康成に師事して、22歳の時に発表した『いのちの初夜』で文学界賞を受賞します。しかし、1937年12月に結核のため23歳の若さでこの世を去りました。

本書は、1934年に全生学園・山桜出版から発行された児童文芸誌「呼子鳥」に秩父見一の名で掲載されたものを、市内在住の絵本作家・おぼまことさんの絵による絵本として、国立ハンセン病資料館から刊行されたものです。



★『童話の木 '15』 町田市青少年施設ひなた村編 （A5判 137頁）

町田市青少年施設ひなた村が、毎年主催する創作童話コンクールの優秀作品集。コンクールは、市内在住・在学の小・中・高校生を対象に1997年からスタートし、今回で19回目を迎えました。応募総数275編のうちから、優秀作品として市長賞、教育長賞、審査員特別賞、ひなた村賞（各々、小学校低学年、小学校高学年、中学校・高校の部の3作品、計12作品）が選ばれ、本書にはひなた村賞を除く9作品が収録されています。

市長賞に選ばれた3人の子どもたちと、選考委員の大林宣彦さん（映画作家）、小林はくどうさん（映像作家）による巻末の「インタビューと講評」の大林さんの言葉・・・「本当に子供達が今の社会の一員として、しっかりと社会を見て、自分達なりに一生懸命考えて表現してくれた作品であるわけです。だから、今日

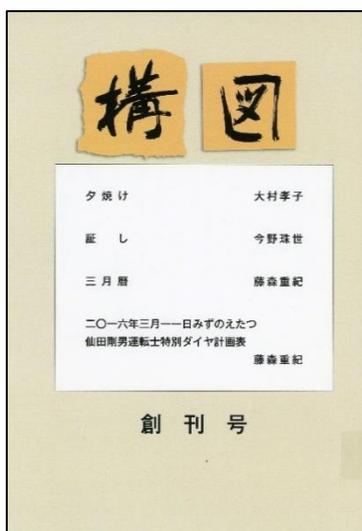
の市長賞を見ている、今の難病の話であるとか、そしてまた原子爆弾の話であるとか、（中略）すべての作品に今の時代というものがきっちりと鏡のように反映していて、（中略）つまり、戦争に勝つ、戦いに勝つ強さではなく、平和を作る強さ、それをね、子供達が一生懸命まさぐっているというのがね、今回全体通じてありましたね。」

タイトル	編著者	出版社	出版年
童話の木 '15		町田市	2016.3
1ねん1くみもうすぐ春	後藤竜二	ポプラ社	1987.4
ビルくんとはたらくるま	新井洋行	チャイルド本社	2016.3
かわいいポール	北条民雄	国立ハンセン病資料館	2016.3
だっこだっこのねこざかな	わたなべゆういち	フレーベル館	2005.6
ねこのひけしや	渡辺有一	フレーベル館	2016.2



寄贈雑誌から

★詩誌「構図」創刊号（2016.3 A5判 12頁） 発行人：藤森重紀 不定期刊



市内在住の詩人、藤森重紀さん創刊の個人詩誌。藤森さんには、すでに『凝視感覚』（2000）、『半世紀回想』（2001）、『雪行列』（2002）、『かたみの音』（2004）、『ときぐすり』（2011）などの詩集（いずれも龍工房）があり、ご著書の「略歴」には「1944年5月、岩手県生まれ」とあります。

本誌裏表紙の創刊にあたっての言葉から・・・「◇鎮魂であれ慰藉であれ、ことばを空疎に羅列したくはない。自己の精神的安寧を希求するうえでも、ことばを厳密に選別し、その効能の翫味をこころがけていきたい。小誌は一応、詩誌の体裁の創刊だが、散文や評論なども適宜掲載し、率直な批評を仰ぎたく思う。／◇震災五回目の命日が近い。どのようにあの日と向き合っていくか。忘却は歳月と表裏一体だが、『あのひとたちがいた』事実を『ことば』に留めておくのは、『いまいるひとたち』われわれの、表現する自覚ひとつにかかっているように思う。」

横浜線

こんなはずじゃなかったんだが
乗る前からわくわくしている

——なぜだろう

町田を通過したら

胸騒ぎしている

——なぜだろう

会いにいく恋人もいないのに
いるような気分になる

——なぜだろう

娘がやってきたところ

よぼよぼの駅舎とすすっぽい車両だったではないか

若返ったのはいつだったっけ

切符が思わず汗ばんでいる

少しずつ垢ぬけしたらしく

線路のひびきもはやいで

——なぜだろう

それが

横浜線なのだ

きめつけるわけにもいかず

答えは未整頓のまま

各駅停車の新型車両は

今

桜木町におずおずと滑りこんでいく。

藤森重紀著『詩集 凝視感覚』より

【主な定期寄贈雑誌】

文芸誌：「相模文芸」「文芸多摩」「ベルク（山の文芸）」

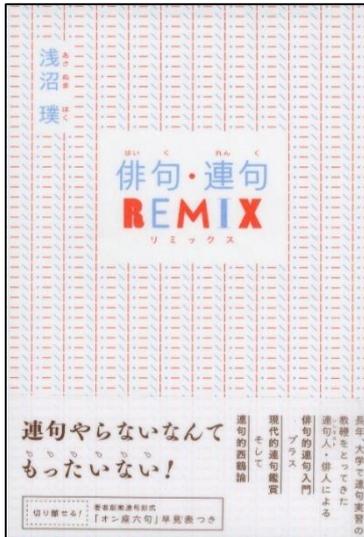
詩誌：「騒」「璞（あらたま）」「構図」

短歌詩：「青垣」「歌と観照」「かがりび」「開耶」「日本歌人クラブ 風」
「玉ゆら」「はなさい」「構図」

俳句誌：「青芝」「阿夫利嶺」「𪗇」「山暦」「蒼茫」「都市」「波」「梅林」
「風土」「八千草」「屋根」

トピックス

連句やらないなんて、 もったいない！

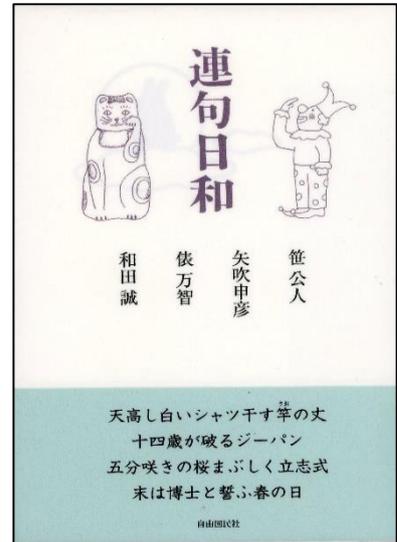


★『俳句・連句 REMIX』
浅沼璞著 東京四季出版
2016.4 (四六判 267頁)

五・七・五の長句と七・七の短句を、複数人間が交互に付け合せて、18句（半歌仙）や36句（歌仙）の詩篇1巻に仕上げる連句。このわが国固有の歌詠み遊びが、いま静かなブームを呼んでいます。

俳聖といわれる松尾芭蕉も、実はこの連句が表芸。江戸時代に広く庶民の文芸として親しまれ、「挙句の果て」「花を持たせる」「景気付け」「付かず離れず」など、連句から生まれた慣用句は、いまでも日常的に使われています。

明治以来、“個の文学”ばかりに目を向けてきた私たちは、「座の文芸」「共生の文学」などと呼ばれる連句をもう一度見直してみる必要があるのかもしれません。



★『連句日和』 笹公人ほか著
自由国民社 2015.9
(A5判 267頁)

■文学館夏の展覧会のご案内■

開館10周年記念

「妖怪がいた！」

「ここにも、そこにも、町田にも」展

会期：2016年7月16日（土）～9月19日（月・祝）

観覧時間：10時～17時 休館日：月曜日、第2木曜日

観覧料：無料